

小久保崇明・山田裕次編

対校「しのびね物語」

大槻修

思えば今を遡ること十数年の昔、学生を相手に「しのびね物語」を読んでいた頃の懐しい思い出である。桑原博史氏の論を参考に、筑波大学付属図書館本・宮内庁書陵部本・蓬左文庫蔵（列帖装）本の三本を対校して、各系統間の本文異同を調査した。桑原氏のご厚情を忝くし、また何度か蓬左文庫にお邪魔し、高山市郷土館の奈良絵本に關しても、学生ともどもご迷惑のかけ通し。その頃だったか、ふとした縁で山田裕次氏と、恩師に当られる小久保崇明氏と、お二人の学恩を蒙ることになった。

それは、山田氏が卒業論文に添えられた副論文のコピーではなかったか—実に細密極まる「しのびね物語」三本の対校一覧表を頂戴した折の感銘は、今に鮮かなものがある。第一系統（筑波大学本）本を底本に、右側に第二系統（宮内庁書陵部本）本を、左側には第三系統（蓬左文庫本）を—整然と三列に分類された対校本文は、小久保氏の善きご指導のもと、既に一冊の刊行書目としての偉容を呈していた。

以後、両氏編「蓬左文庫蔵しのびね物語」（昭52・4、笠間書院）、山田氏「蓬左本しのびね物語覚え書き」（「解釈」

第九号、昭53・9)などの学恩を受け、本学大学院生松井(旧姓山内)澄子を始め、何人かの本学学生の研究が発展したこと、この機会を借りて、厚く御礼申し上げたい。

今、机上の、小久保・山田両氏編「対校『しのびね物語』全二五八頁」を前にして、変らぬ慎重な態度を感得する。全体を八十二段に分け、三本各丁オ・ウの明示、行間添書や脱文箇所の指示、書陵部下冊末の和歌十首を付録として添え、凡例の最後には、翻刻に際して、書陵部本の「い」と「ひ」、「え」と「し」など判断に迷うことが多かったこと―実は私も、校本作成の折、それが頭痛のタネであったが―まで明記されている。また、収録本解題に添えて、「新子の系譜と欧帖装本『しのびね』の伝来」と題した論考があり、蓬左文庫蔵列帖装本の理解を便ならしめている。

一度経験すると、校本作りの面倒さ加減が身に滲むものだ

が、山田氏の学問的な誠実さは、原稿を出版社に出されてから完成まで、何年を要したことか、そのご苦勞を多とすると同時に、そこに本書の犯しがたい価値を見出すのである。悲恋通世談を主題とした中世擬古物語の一つとして、現存「しのびね」は、古本の内容の概略化、梗概化と目する向きもあるが、やはり改作者による相当程度の意図的改作が成されたと考えたい。神野藤昭夫氏が、物語史変貌の一軌跡として、散佚古本↓現存改作本↓「しぐれ」といった系譜のもと、その経過を辿られるなど、いわゆる古物語からお伽草子へと、今後、「しのびね物語」の位置づけを、より明確にせむとする時、この度の「対校『しのびね物語』」の刊行は、まさにその時を得たものとして、広く一般に徳澤したいのである。

(昭和六〇年五月一〇日刊、四六版、一五八ページ、四、五〇〇円 和泉書院)